

特集2

明るい選挙推進優良活動表彰

特集1

シンポジウム  
「若者啓発グループに参加して」



新連載

スウェーデンのシティズンシップ教育〈第1回〉

新連載

絵本「田澤 義舗」〈第1回〉

名言の舞台..... 3

特集1 シンポジウム「若者啓発グループに参加して」..... 4

特集2 明るい選挙推進優良活動表彰..... 11

さいたま市明るい選挙推進協議会（埼玉県）

練馬区明るい選挙推進協議会（東京都）

町田市明るい選挙推進協議会（東京都）

神戸婦人有権者連盟（兵庫県）

長崎市明るい選挙推進おたくさの会（長崎県）

鹿児島県学生投票率100%をめざす会

奄美市明るい選挙推進協議会（鹿児島県）

沖縄県明るい選挙推進青年会VOTE

スウェーデンのシティズンシップ教育<第1回>..... 18

「社会に生きることが<政治>」

放送大学教授 宮本 みち子

時の話題 医師確保策..... 20

メイスイ列島フラッシュ..... 22

各地の活動

絵本 田澤 義鋪<第1回>「生い立ち」..... 24

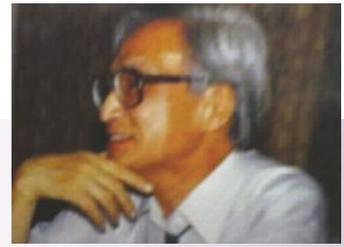
協会からのお知らせ、編集後記..... 27

何か足りないような何となく不安を感じさせる色使いで描かれた作品です。「忘れていませんか？その大切な一票」という標語と相まって、選挙に行くことの大切さを巧みに訴えかけています。人物の描写も簡潔で表情豊かにまとめられています。

〈表紙の紹介〉  
村上 尚徳  
（文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官）

杉下 芙由子さん  
石川県立工業高等学校2年生（当時）





# 民主主義の 永久革命

丸山眞男は日本を代表する政治学者で、東京大学法学部におけるアジア政治思想史講座担当者として、『日本政治思想史研究』『忠誠と反逆』など数々の業績を残しました。また、軍国主義時代の日本における行動原理を分析した『超国家主義の論理と心理』（昭和二十一年）をはじめ論壇でも活躍し、サンフランシスコ講和や六〇年安保など現実政治に対する論客としても知られています。

あるとき丸山が自身の政治的立場を問われて、答えたのがこの言葉とされています。日本国憲法のもと、戦後日本は民主主義国家として再出発しました。しかし、民主政体としての諸制度を整えるだけでは不十分で、国民が民主主義の真のマスターたりうるように、民主政治を内発的なものにするように努力しなければなりません。

高校教科書などで読まれた方もい

らっしゃると思いますが、「『である』ことと『する』こと」という論文の中で、丸山は次のように言います。

「民主主義というものは、人民が本来、制度の自己目的化―物神化―を不断に警戒し、制度の現実の働き方を絶えず監視し批判する姿勢によって、はじめて生きたものとなり得るのです。それは民主主義という名の制度自体についてなによりあてはまる。つまり自由と同じように民主主義も、不断の民主化によって辛うじて民主主義でありうるような、そうした性格を本質的にもっています。」

われわれは主権者「である」という地位に甘んじるのではなく、一人ひとりが治者たらんと「する」こと。主権を行使する最も身近な機会である選挙に際して、嘯みしめたい言葉です。

# 若者啓発グループに参加して



## 【パネラー】

- 岩瀬 僚 さいたま市青年選挙サポーターの会「E-Rail さいたま」  
 高田 明日香 福井県明るい選挙推進青年活動隊CEPT  
 土橋 明美 鹿児島県学生投票率100%をめざす会  
 間 一仁 沖縄県明るい選挙推進青年会VOTE  
 小野 育恵 ミニ選挙管理委員会2001(in延岡) 宮崎県延岡市

## 【コーディネーター】

- 松本 正生 さいたま市明るい選挙推進協議会会長  
 (埼玉大学経済学部教授)

明るい選挙推進協会は、本年三月四日と五日、東京都千代田区で平成二〇年度中央研修会を開催し、都道府県・指定都市、市区町村の明推協会長・委員、選挙書記など二一〇人が参加しました。中央研修会には、若者啓発グループで活動している五団体のメンバーをパネラーに迎えてシンポジウムを行いました。各パネラーは、選挙サポーターやボランティアとして取り組んでいる啓発活動のきっかけ、意義を紹介するとともに、活動にあたって苦心していることや課題などを報告。会場の参加者も交えながら活発な意見交換を行い、これからの若者啓発活動のあり方について議論を深めました。

## 同じ若者の立場で啓発活動を展開

**松本** (コーディネーター) 今日のシンポジウムには、全国各地で活動している若者啓発グループの皆さんに出席いただきました。

ボランティア活動は対価の伴わないものであること、そして選挙に関して主役は政治家・候補者であってボランティアは脇役であること、だからこそ貴重で大切な存在なのですが、あえてこのような活動に取り組みまれたきっかけと、どのような活動に取り組みんでいるのか、課題は何かなどについて、会場も交えながら意見交換をしていきたいと思えます。

まず、活動に参加した動機や経緯、グループの活動内容についてお話しください。

**岩瀬** さいたま市のE-Railさいたまの代表を務めている岩瀬僚です。私が高校生どきに小泉首相の郵政民営化選挙があり、若者の政治への関心が高まりました。しかし、雰囲気流されて投票に行く姿に少なからず疑問を抱き、もう少し考えて投票すべきではないかと思いました。大学は政治経済学部に入りましたが、大学の授業でE-Railのことを知り、選挙や若者の政治意識について考えてみたいと思い、参加しました。





**高田** 福井県明るい選挙推進青年活動隊CEPT隊員の高田明日香です。私がCEPTに参加したのは、二〇歳になって選挙権が与えられ、選挙に関心を持つようにな

ったとき、たまたま友人に誘われたのがきっかけでした。私の初めての選挙は先の衆議院選挙でした。全体の投票率は高かったのですが、若者の投票率は低く、同年代はなぜ選挙に行かず政治に無関心なのかと感じました。そこで、同じ若者として選挙の大切さや意義を伝え、投票を促進したいと思い、活動しています。

現在、チラシやホームページをつくり、会員の募集に力を入れています。埼玉大学入学式や咲いたまつり、大宮区民まつりなどで会のPRや勧誘活動を行いました。また、さいたま市明推協の研修会にも参加し、推進委員とともに選挙や選挙啓発などについて考えました。

主な活動は、大学祭での選挙啓発活動、ラジオ・テレビでの投票の呼びかけ、活動報告冊子の作成、模擬選挙の実施、研修会への参加などです。平成二〇年度は、福井大学の大学祭でブースを出店し、大学生たちに選挙や政治に対する熱い思いをスケッチブックに記してもらい、それをポラロイドカメラで撮影してパネルに掲示する活動を行いました。また、福井マラソンに参加し、「いくぞ選挙！明日のために」と書いた横断幕を掲げ、お揃いのTシャツを着て五キロのコースを走って選挙啓発を行うなど、いろいろな活動にチャレンジしています。

質問は、「二〇歳になると次のことができませんが、嬉しいことは何ですか（投票、飲酒、喫煙、婚姻の自由、ギャンブル）」「生活していく上で、利用している情報源は何ですか」「選挙に行きたいと思いますか」の三項目で、選挙についての回答を見ると、六九%が「選挙に行きたい」と答えたものの、「面倒くさい」「投票しても意味がない」などの意見も多数ありました。

CEPTは、「クリーン・エレクトション・プロモーション・チーム」の略称で、明るくきれいな選挙を進めようという若者の選挙啓発ボランティアグループです。現在一四名が参加し、平均年齢は二二歳。月一〜二回、選挙啓発活動の企画会議をワイワイガヤガヤと楽しく行っています。また、政治や選挙の勉強会も進めています。

**土橋** 鹿児島県学生投票率一〇〇%をめざす学生会長の土橋明美です。私がこの会に参加したのは、大学一年のときに先輩に誘われたのがきっかけでした。それまでは選挙や政治に興味はなく、友人と選挙について話すこともありませんでした。が、せっかくの誘いだったので会合に顔を出し、そのまま入ることになりました。





**問** 沖縄県明るい選挙推進青年会VOTEで出前講座を担当している間一仁です。

私は琉球大学教育学部の学生で、社会科学の教師をめざしています。社会科学は、学習指導要領に「公民的資質の基礎を養う」とあるように、子どもたちに市民性を育成する教科です。その教師をめざしている自分にとって、昨今の投票率の低下は見過ごすことのできない問題であり、社会科学教育にその責任の一端があるのではないかと考えるようになっていました。そのような問題意識を持っていたところ、島袋純先生（琉球大学教育学部教授、沖縄県明推協会会長）の市民性教育を強く意識した授業を受けました。そして、島袋先生のゼミ生だった新田繁睦さんを中心にVOTEが出前講座を行っていることを知り、市民性教育を学び、実践したいと思い、この会に参加しました。

VOTEの活動の売りは、市民性教育を強く意識した出前講座で、小中高校の学校教育向けの出前講座と公民館講座があります。小学校の出前講座は、学校の中で困っている問題とその解決策を考えさせ、簡単なミニフェストの作成と立会演説を行って、模擬投票する流れで実施しています。中学校の出前講座は、まちづくりゲームを取り入れ、地域づく

りをテーマに、生徒が集落の代表となって公共施設の配置などを話し合っって政策をつくり、いい政策に投票する流れで行っています。公民館講座では、実際に地域に出かけて課題を発見し、解決に向けた政策を立案して、どの政策がよかったかを判断して模擬投票を行っています。

**小野** ミニ選挙管理

委員会2001（in

延岡）、通称「ミニ選」

の会長を務めている小野育恵です。大学一年のときに、当時



会長だった先輩に出会い、ミニ選のことを聞きました。先輩は本当に楽しそうに活動のことを話してくれました。それで興味がわき、定例会に顔を出しました。それが参加したきっかけです。

ミニ選では様々な活動を行っていますが、なかでも力を入れているのが大学の学祭で行っている模擬投票です。ミニ選で企画立案しますが、投票してもらおう候補者に扮して会場でミニフェストを発表する人たちは、学祭で出店するサークルやゼミの学生から募っています。この模擬投票とともに力を入れているのが、選挙CMづくりです。CMの内容やシナリオなどは月一回の定例会で、メンバーみんなアイデアを出し合っって決めていきます。そして、夏休みなどを利用して撮影し、市の

広報番組などで流しています。そのほか、地域の祭りやイベントなどに出向いて啓発活動、選挙時の投票事務なども手伝っています。

活動にあたっては、「I ♥ MN」と書かれた揃いのTシャツを着ています。MNは「ミニ選」と「宮崎延岡」を表わしています。ミニ選は学生だけでなく市の選管の方も一緒に活動しますが、選管の方もこのTシャツを着て、一体感を高めるとともに、ミニ選のPRに努めています。

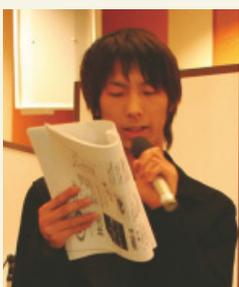
**松本** ありがとうございます。ここで、お互いにもう少し聞きたいことがあれば質問してください。

**高田** ミニ選に質問ですが、なぜCMを制作しようと思ったのでしょうか。また、CM制作の流れを教えてください。

**小野** CM制作は、ミニ選が活動を開始した平成一三年当初から計画されていきました。当時のことはよく分らないのですが、テレビでの選挙啓発が有効だと考えたからではないかと思えます。制作の手順は、実際に携わったメンバーの用正さんから説明してもらいます。

**用正**（会場） ミニ

選会員の用正裕幸です。私は次の選挙用の「みんなでダッシュ投票へ行こう」と「遭難しています。」



というCMづくりに参加しました。四月くら

いからメンバーと市職員でCMのアイデアを出し合い、同年代の若い人たちに興味を持ってもらうようにストーリーやセリフなどを練って、八月にキャンプをしながら撮影しました。CMに登場するのは学生が中心で、撮影には市の広報の職員の協力を得ています。撮影した映像には、学生が興味を示すようにアフレコで声を入れ、完成させました。CMは選挙実施前に、具体的な投票のやり方などを付け加えて市の広報番組などで流しています。

**小野** VOTEに質問です。ミニ選でもやってみたいので、出前講座の実施の手順や留意点を教えてください。

**間** 出前講座は島袋先生が作成した「市民性教育副読本」を活用して行っています。副読本は沖縄県選管のホームページに掲載されており、それを見れば進め方が分かるようになっていきます。詳しく知りたいということであれば、どこへでも説明に行きますので声をかけてください。

この出前講座に取り組むきっかけになったのは、沖縄県明推協主催の青年リーダー研修で、参加者から「具体的な政治参加のリテラシーを学習しないで、二〇歳になってからいきなり選挙に行けといわれても難しい」という指摘を受けたことでした。実際に小中学校で出前講座を行うと、「子どもたちから「二〇歳になったら選挙に行くからね」と言われます。

## 活動で選挙に対する意識が変わった

**松本** 様々な活動が行われていることが分かりましたが、このようなボランティア、サポーターの活動に入る前と入って

活動した後で、ご自身の選挙や政治に対するイメージは変わりましたか。変わったとしたら、どのように変わりましたか。



**小野** 私はミニ選に入る前から、選挙は行かなければいけないものだと思っていましたが、ただ正直なところ「面倒くさいな」という気持ちがあつて、選挙に対する印象もほんやりしたものしかありませんでした。しかし、

ミニ選に入って実際に活動してからは、「選挙とはこういうものなのか」「こう考え、こういうところで判断すればいいんだ」というリアルな感覚を得ることができました。まだ選挙に行く機会はないのですが、「行かなければいけない」ではなく、「行きたいな」と意識が大きく変化しています。

**土橋** 私がこの会に入ったときは、選挙権はまだ持っていませんでしたし、選挙に興味はありませんでした。でも、会に入って自分が街頭に立ち選挙啓発活動に取り組んでみると、それまでの自分がそうだったように、選挙に興味を持っている人が本当に少ないこと

を実感しました。そして、活動を続けていく中で、「一票でも多く投票してもらえればいいな」「投票率が上がればいいな」という思いを抱くようになりました。今では、社会の一員として、選挙があるときには必ず投票に行こうという気持ちを持っています。

**岩瀬** 高校時代、雰囲気になされて投票に行く姿に選挙に対するネガティブなイメージを感じていましたが、それは今でも変わっていません。しかし、そのネガティブなイメージをポジティブなものに変えていこうというのが、活動に参加したきっかけでもあります。社会を変えていくには意見や疑問を表す必要があり、そのために選挙権を行使して自分の意思を表明しなければならぬという思いを持つようになってきました。

**高田** 選挙権を得たことで選挙に関心を持つようになりましたが、選挙に対するイメージは漠然としたものでした。でも、活動に参加し、また勉強会などを通して、選挙や政治の重要性がだいぶ理解できるようになりました。活動に参加して感じたことは、選挙に対するイメージとは関係ないかもしれませんが、メンバー全員で協力し合い、すべて自分たちの手で企画し、実行に移すことの大切さややりがいです。活動しているときは大変なこともありますが、自分たちのやりたいことができると、一つのことを成し遂げたときの達成感はい

格別です。新たな活動を考えていく企画力や目標に向かって努力し、推し進めていく行動力も身に付いたと思います。この活動を通して、自分を高めることができましたと実感しています。

**松本** 会場にも活動しているグループの方々がいます。かながわ選挙カレッジは様々な活動を実施していますが、カレッジ生の矢木聖那さんは活動に参加してどう意識が変化しましたか。

**矢木**（会場） かながわ選挙カレッジは、現在十一人の大学生で、若年層の低投票率対策として参加型啓発活動を行っています。



これまでの活動で印象に残っているのは、VOTEの新田さんに研修会に来ていただき、まちづくりゲームを行ったことです。大学の授業などで選挙の重要性を分かったつもりでしたが、実感としてはなく、まちづくりゲームに参加して、選挙が自分たちの代表を選ぶものだとということを実感し、選挙の重要性が認識できました。活動に対するモチベーションも高まり、同じ世代に選挙の重要性を伝えていきたいと思っています。

## メンバーを増やすことが第一の課題

**松本** 学生中心の組織だと卒業によるメンバ

ーの入れ替えにより組織的につながっていかないことや、ボランティアでお金がないことなどの制約があります。次に、活動していく上で苦心していることや課題についてお話しください。

**小野** ミニ選は大学生中心に活動しているので、定例会などの時間の調整に苦労しています。授業などでメンバーが集まらないと意見交換ができず、また活動に参加できないメンバーが増える则会の活力が失われてしまいます。メンバーの勧誘も課題で、入学式や新生歓迎会のときにチラシを配り、目星をつけた人には積極的に何度もアピールしています。自分たちが楽しんでやっているんだというのを前面に出すことで、やろうという学生が出てくると思います。

また、選挙に関する知識を、グループ外の人にどうやって持つってもらうかも課題です。**高田** C E P Tの悩みも、企画会議になかなか全員が集まらないことです。次の活動を決められないことも少なくありません。欠席者へは選管の方に会議内容をメールしてもらい、フォローしています。

新メンバーの応募がないのも課題です。メンバー募集のチラシを配布し、友人や後輩に積極的に声をかけ、現在は一四名になりました。「いくら投票しても政治は変わらない」と頑固に考えている人は多いのですが、少しでも政治に興味を持っている人が入ってくれ

るといいと感じています。やる気のある人がいればグループは波に乗ることができると、そういう人を探します。

**間** VOTEでは大学生は私一人なので、メンバーを増やすことが最優先課題です。

**土橋** 平成十一年に設立された「めざす会」も、多いときは三〇名ほど会員がいましたが、いまは一六名に半減しています。しかも男子メンバーが二人しかいないので、会員を増やすことが課題です。

**岩瀬** 私たちの組織E-Rainはその逆で、女子メンバーがいません。やはり人数が少なく、この三月には四年生が抜けてしまいます。いかに下の世代に引き継いでいくかが課題です。

**松本** どこもメンバーを集めるのに苦労しているようですが、会場の皆さんのグループではどうでしょうか。仙台市で活動している仙挙行こう会幹事の前田剛典さん、いかがですか。

**前田**（会場） わたしは現在仙挙行こう会幹事ですが、その前は市選管が募集した選挙サポーターに加入し、四年間活動



しました。選挙サポーターは七〇名で発足し、二年後には一〇〇人を超えました。会議の時問合わせは常に課題であり、毎月時間を決め

て進めていくうちに固定メンバーが定まっていきました。そして、興味を持って新しく入った人が固定メンバーに加わったり、仕事が忙しくなり参加できなくなった人が外れていくなど、少しずつメンバーが入れ替わりながら活動を継続してきました。サポーター全体のメンバー不足はありませんでしたが、実際に活動していたのは二〇〜三〇名、コアメンバーは一〇名程度でした。街頭啓発や様々なイベントに参加して啓発活動を行いました。参加する人は限られてきます。ですから、メンバーがどれくらいいるかが大事だと感じました。

**松本** 名古屋青年選挙ボランティアの古村聖さんは、活動を長く続けられているようですが、その理由は何なのでしょう。

**古村**（会場） ボラ

ンティアのメインの活動は年一回開かれる「選挙フェスタ」の企画運営ですが、私は高校一年から七



年間、活動を続けています。これまで続けてこられた理由は三点あると思います。まず、様々な人、自分と違う環境にいる人と出会い、話し合うことができたことがあげられます。それから出席について厳しくないこともあります。活動への出席は本人の自主性に任せられ

ておりますが、欠席しても選管の方が会議内容をきちんと知らせてくれました。前回出られなくても、次回にきちんと人が集まって話し合うことができる空間をつくってくれ、会議をきちんとできる状態で活動ができていくことも、続けてこられた理由ではないかなと思います。

最も重要だと思うのは、実際にイベントの企画に参加することによって、私自身が選挙に向き合うきっかけができたことです。イベント参加者に、どうやって楽しんで体験してもらいながら選挙について関心を持ってもらうかについて、時に白熱した議論がなされました。高校の時はなんの気なしに参加しましたが、私自身、政治にきちんと関心を持って成人を迎えることができました。

活動を始めた頃は最年少メンバーでしたが、いつのまにか古株になりました。私自身がまわりの人に育てていただいたように、強制するのではなく活動の中でおのずと関心が芽生えるように協力できたらと思っています。ひいては活動に本人の意思が反映していければいいなと考えています。

**松本** メンバーの確保と活動時間の調整が共通の課題になっているようですね。特にメンバーの確保は、活動をPRするほか、個人的なネットワークを駆使して勧誘する地道な取り組みが大事だと感じました。われわれとしても、若者グループが活動しやすい環境づく

り、サポート体制を考えていく必要があるでしょう。

## 会場からの質問 「18歳選挙権についてどう思うか」

**松本** ここで、せっかくの機会なので、会場から質問を受けたいと思います。

**質問** 一八歳選挙権をどうお考えでしょうか。実現してほしいと思いますか。

**小野** 一八歳選挙権については、まだ早いのではないかと思います。判断能力はあるのですが、どう判断すればいいのかの教育が行われていないからです。

**問** 学校教育で政治参加のリテラシーを学習しないで選挙権を与えられても難しいという声があったことを考えると、それが担保されなければ一八歳選挙権はどうかかなと思います。

**土橋** 選挙権については、高校を卒業して働いている人もいるので一八歳からでもいいとは思いますが、やはり少し社会のことを学んだ上で選挙権を持つことが大事ではないかと思えます。

**高田** 一八歳選挙権に対しては否定的な考えを持つています。判断能力が十分備わっているかということがあるからです。

**岩瀬** 一八歳選挙権はあってもいいと思います。少子化で人口が減っているのです、少しでも多くの人が投票できるようにしたほうがいい

いのではないですか。

**松本** ありがとうございます。一八歳選挙権に関しては、ネガティブな答えが多いのではないかと予想していましたが、そのような答えが多かったですね。私も大学で講義を持っており、去年と今年、学生に一八歳選挙権についてのアンケートを取ってみました。二年間とも「反対」の意見の方が多かったですね。そこからは、若者特有の謙虚さと自信のなさのようなものが感じられました。

### 情報交換と連携ができる場づくりを

**松本** それでは最後に、今後取り組んでみたいことについて、現在計画中のものや、夢でも結構なのでお話しください。

**岩瀬** 近々さいたま市長選があるので、ショッピングセンターでの啓発イベントを計画しています。また、ミニ選のようなCM制作も企画しています。先輩グループの活動を参考に、いろいろな活動を行っていきたくと考えています。

**高田** 私たちも、ミニ選をお手本にCM制作に取り組んでいきたいと思っています。成人式での模擬選挙にも取り組んでいければと考えているところです。

**土橋** 先輩たちは人数が多かったので、イベントでの啓発活動として「〇×クイズ」やダンスなどのパフォーマンスを行っていました。しかし、現在は人数が少ないので、活動

が限られてしまっています。人数を増やして、これまで先輩たちが行ってきたような活動を復活できればいいなと思っています。

**間** 市民性教育を意識した出前講座は一定の評価を受けていますが、それに甘んじることなく、つねに活動を問い直していかなければなりません。そこで諸外国の取り組みなども研究する必要があるのではないかと思っております。例えば、イギリスは学校教育の中でシブズンシップ・エデュケーションを行っており、米国ではサービスマン・ラーニング（地域社会の課題解決をめざした社会的活動に子どもを積極的に関与させ、子どもの市民性を発達させることをねらいとした教育方法）を行っております。それらは私たちの出前講座の参考になるのではないかと感じており、活かしていけたらと個人的には考えています。

**小野** 地元でマラソン大会があるので、給水ポイントで啓発活動を行う案が出ています。

個人的には、せっかく全国で活動しているグループが集まったのだから、これを機会に共同のホームページをつくったらどうかと思えました。ネットを通じて情報交換や連携ができるので、活動の広がりも期待できます。

また、このような報告の場も必要ですが、若い人たちは堅苦しい場を嫌うので、もっと気軽に参加できる仕掛けも必要ではないでしょうか。ミニ選も過去に他のグループとキャンプ場で交流会を行い、情報交換をしたこと

があります。

**松本** 諸外国の市民性教育を研究することやお互いの情報交換の場づくりなど、いい提案がありました。連携に向けては交流会を行うという企画もあるようで、非常に楽しみです。

本日のシンポジウムでは若者啓発活動のメンバー確保が課題として挙げられましたが、私自身は若者を対象にした選挙啓発活動の広がりについて悲観的には考えていません。若者が動き出すきっかけはどこにでもあります。それを我々がどうサポートするかを考えていくことが大事ではないでしょうか。本日の集まりを機に、新しい活動が生まれることを期待したいと思います。長い時間どうもありがとうございました。

率先して活動している壇上のパネラーに、いま一度大きな拍手をお願いいたします。



## 特集2

## 明るい選挙推進優良活動表彰

平成二〇年度

明るい選挙推進優良活動表彰は、明るい選挙の推進活動の中から、他の模範とするにふさわしい活動を表彰して、その功績を讃えることにより、この活動の前進、拡大を図ることを目的としています。平成二〇年度は、若者啓発グループを含め一三団体からの応募がありました。明るい選挙推進協会内に設置した選考委員会（学識経験者九名で構成）における厳選の結果、八団体を選ばれ、三月四日開催の総会において表彰式が行われました。以下、受賞団体の活動概要をご紹介します。

## さいたま市明るい選挙推進協議会

さいたま市は、平成一三年に浦和市など三市の合併により誕生し、平成一五年四月に政令市に移行した。一六年度には、各区明推協が新たに組織され、続いて学識経験者、各区明推協などの代表者で構成される「さいたま市明推協」が設立された（現会員数一九名）。市明推協は市全体の方針・計画を決定し、区明推協はそれぞれ独自の啓発活動を行うとともに、互いに連携をとりながら協働して活動している。

## 研修委員会が主体の研修会

設立当初（一六年度）に行われた市区合同明推協啓発研修会では講演会を実施し、一七年度にはグループワークを行った。しかし、計画や当日の司会などすべてを選管職員が行

っていたため、推進委員等の中から「ただ参加するだけでいいのか」「行政主導ではなく自分たちの手で研修を行うべきだ」などの意見が出された。そこで、明推協自らが研修の方針や計画を考え、実際に運営する形態について、模索することとなった。

時期を前後して、機能や運営面の充実を図る目的から、市明推協の組織に、「広報委員会」と「研修委員会」が設置された。その結果、一八年度以降の研修会は、研修委員会が中心となって検討・実施されることとなった。一八年度には本番さながらの開票作業体験と「明るい選挙推進運動の現状と課題」をテーマとした講演を、一九年度は明推協の周知度が低い現状を打破するためのグループワ

ーク「一人でも多くの人々に明推協活動を理解してもらい広めるためには」を行った。二〇年度は、各区の活動の事例発表やグループ討議「これからの啓発活動を考える」などを



若者が参加（平成20年度研修会）

実施した。広報委員会が事例発表区の選出を行い、二つの委員会が初めて連携をとることができた。グループ討議には若者の参加を求めるとし、二〇年一月に発足したばかりの、さいたま市青年選挙サポーターの会「Rayさいたま」のメンバーと埼玉大学の学生の参加を得た。また、各区へのフィードバックとして、研修会の報告書を作成し、翌年度の各区明推協の総会の場で報告し、区推進員に周知を図ることとなった。

これらの研修会は、テーマの設定、当日の会場の設営、リハーサル、進行、受付等をすべて研修委員会のメンバーが主体的に行っており、委員同士で意見を出し合い、経験を積み重ね、情報を共有化することにより、年々充実した研修会を開催できるようになってきた。

## 研修会の成果

研修委員会が主体となって行った研修会の成果として、①研修委員自らが計画したこと、②当日の責任感が生まれ、グループワークなどで率先して意見を出し盛り上げることができ

た、②研修会参加者として、よかった点、悪かった点を終了後に話し合うことにより、翌年の研修会に生かされた、③研修委員会で培ったノウハウを区の明推協に持ち帰り生かすことができたこと、などが挙げられる。

\*

合併・政令市移行によって新しく生まれた明推協の委員が活動の目的と責務を自覚して自ら研修会を企画・運営していること、その研修事業は区明推協との役割分担まで考えられている点、また青年リーダーの養成にも取り組んでいることが評価された。

## 練馬区明るい選挙推進協議会

東京都練馬区明推協（昭和三二年設立、現会員数一四一名）は、常時啓発事業の一環として、一般区民向けの「白ばらだより」と、推進委員向けの「推進委員だより」の二種類の広報誌を発行しており、いずれも、推進委員が編集委員を務め、企画・編集に当たっている。

### 二つの広報誌

「白ばらだより」（昭和五一年度創刊、年二回、各六千部発行、A4判八頁）は、区民向けの選挙啓発誌として各種啓発事業の紹介、選挙結果、選挙に関する特集記事や豆知識などを掲載。区立施設に置くほか、推進委員が一人三五部ずつ配布している。

以前は、事務局の職員が編集を担当し、必要に応じて推進委員に原稿依頼をしていたが、協議会の場で「誌面づくりに区民の視点も必要ではないか」「推進委員も編集に携わったらどうか」という提案があり、平成十一年度に推進委員による白ばら編集委員が誕生した。

「推進委員だより」（平成一六年度創刊。年二回不定期、各二〇〇部発行、A4判四〜十二頁）の刊行のきっかけは、推進委員から「『白ばらだより』の内容が区民向けなのか推進委員向けなのかはつきりせず、一般の方に配布しにくい」という意見が寄せられたことであった。協議会で検討した結果、「白ばらだより」は区民向けとして充実させ、新たに推進委員向けの情報交換誌「推進委員だより」を発行することとなった。

### 編集委員の役割

編集委員は七名、委員の任期は二年、半数ずつが入れ替わっている。編集委員の役割は、①わかりやすい内容にするため、一般区民に近い視点で記事を企画・作成する、②編集業務全般に携わり、掲載内容やレイアウト等について様々なアイデアを出す、などである。

事務局の役割は、①公職選挙法上問題がありそうな記事に関して助言する、②写真・イラスト等求められた資料を提供する、などとなっている。

推進委員が編集にかかわる最大のメリットは、編集に区民の視点加わる点である。取り上げるテーマも、推進委員の活動や周りの区民の意見からヒントを得た企画が加わり、多様化している。

これまでに編集委員の発案で記事にしたものとして、地域ごとに選挙の種類によって投票率に特徴があることの原因を探った「あなただけの地域の投票率、ご存知ですか?」、区内在住の二〇歳代にアンケートをとり生の声をまとめた「投票へは行きましたか?」などがある。

苦勞の多い編集の仕事も、「とても楽しい」「大変だけれどやって良かった」といった感想が委員から寄せられており、この経験が様々な啓発活動に生かされていくことが期待されている。

\*

事務局職員ではなく推進委員自らが一般向け「白ばらだより」と推進委員向け「推進委員だより」の二種類の広報誌を企画・編集していること、その内容も優れていることが評価された。



編集会議

## 町田市明るい選挙推進協議会

東京都町田市明推協（昭和三三年設立、現会員数八〇名）は、毎年明るい選挙推進方針および事業計画を決定し、これに基づいて協議会内に設置した部会（企画・編集・研修）において細かな事業内容を話し合いで決定している。①企画部会は市民祭等での啓発活動や推進委員への連絡・調整を行い、②編集部会は選挙啓発紙の記事の執筆から編集までを行う。③研修部会は、推進委員の選挙に関する知識の向上を目指し研修事業の企画を行っているが、研修部会からの一方的な研修とならないよう、推進委員に研修内容の希望を聞き、ニーズに合った研修の実施を心がけている。

### イベントを活用して啓発事業

協議会では、市全体で行われるイベント事業や地域センター祭りなど地区に分かれて実施される事業に参加することによって、明るい選挙推進の啓発事業を展開している。推進委員は、揃いのたすき、はつぴ、ジャンパーを着用し、のぼり旗を持ち、啓発物品を配りながらイベント会場内を巡回する。またイベントによっては、次のような啓発活動も行っている。

①平成二〇年十一月に行われた市のイベント「健康づくりフェア」では、会場にブースを設置し、「どうぶつむら村長せんきよ」の模擬投票を実施し、親子連れや子供のグルー

プなどで賑わった（投票者数は一八〇人）。これには、二〇年度桜美林大学に誕生した政治参加推進サークル「PIC（ピック）」の参加もあり、候補者のポスターや公約はメンバーが考え作成した。今後も推進委員と若年層をつなぐパイプ役として、同サークルと連携を深めていくこととしている。

②成人式会場では撮影コーナーを設け、推進委員がポラロイドカメラで新成人を写し、撮影した写真を台紙に入れ、啓発物品と一緒に渡している。毎年行列ができるほどの人気である。

### その他の常時啓発

①推進委員の活動や選挙の仕組みなどを分かりやすく伝えるため、タブロイド判の選挙啓発紙「ま

## 神戸婦人有権者連盟



成人式会場での記念撮影

神戸婦人有権者連盟は、昭和二四年に発足し、今年で創立六〇周年を迎える。発足のきっかけは、昭和二一年に行われた第二二回衆議院選挙について、米軍政部のジョセフィン・コレット女史から、「初めて参政権を行

ちだしろばら」を発行している。四頁多色刷りで、イラストや写真を多く掲載し、堅苦しくならないようにしている。

②二〇歳を迎える市民にバスデーカードを郵送している。二つ折のハガキの内側に啓発メッセージを印刷。選挙時には投票日を印刷したシールを貼り、投票参加の呼びかけにも活用している。

③研修部会が計画する市議会傍聴や選挙制度講義等の研修事業を行っている。

### 選挙時啓発事業

選挙時の広報車巡回、街頭啓発、啓発物品の配布は、主に推進委員が担当している。広報車巡回では、推進委員がスピーカー付きの庁用車で市内を巡回し、前回投票率が低かった地区などを重点的に回っている。

\*

活動内容が多彩であること、企画・編集・研修の三部会を設け、自主的な活動を志向していること、若者グループと連携した啓発活動や、成人式での写真のプレゼントなどの地道な活動を続けていることが評価された。

使した日本婦人の政治に対する関心があまりにも薄い。婦人啓発団体を創りなさい」との助言をうけたことによる。そこで、母里美枝さん（第二代会長）を中心に四一名の婦人が集い、婦人の政治意識の昂揚と啓蒙を目指す

連盟が発足した。

### 幅広いテーマで月一回「勉強会」を開催

その後、啓蒙運動の方法も時代とともに変わり、「内外情勢の諸問題を正しくとらえ、判断力をもつことこそ、明るい選挙推進運動の根本となる」という理念のもとに、月一回の勉強会を重視するようになった。近年は「勉強を重ねたその成果を一票にこめて、正しく投じること」を活動目的にしている。

趣旨に賛同する有権者であれば誰でも参加でき、会員は八〇名。神戸市や近隣市在住の五〇〜八〇代の女性を中心だが、男性会員が二名いる。年会費三千元、通信費二千元、当日会費五〇〇円を徴して自主運営を行っている。

勉強会は、毎月開催し、毎回二五人前後が参加する。講師陣は大学教授やジャーナリストなどが中心で、テーマは日本の政治・法律・歴史、世界情勢など幅広い。講演の後の質疑応答の時間は必ず設けている。また、勉強会抄録を必ず二〇〇冊発行し、過去一〇年間の講師全員、全会員、関係団体、新聞社等報道機関へ送付している。

### 若い会員を増やす

新しい会員を増やすため定例の勉強会に加え、平成二〇年



勉強会の模様

度から一方的に講義を受けるのではなく、講師を含めて一緒に本を読み、世の中の問題を気軽にみんなで話し合い、自由に入りができる集まり（セミナー）を始めた（二〇年度は五回開催）。義務的で堅苦しくなく、世の中について自らの見方を豊かにしてくれる「セミナー」を目指している。口コミによる勧誘や友人への呼びかけ、メールによる情報発信などで、若い層の参加が少しずつが増えてきている。

### 明るく正しい選挙を推進するために

国政選挙時には、連盟のタスキをかけた会員が、街頭に立って道行く人々に積極的にビラを手渡し、棄権防止を呼びかけている。ま

た、勉強会のPRと勧誘のチラシを作成して有権者に配布している。

立候補者に対しては、①明るく選挙の実践、②法定選挙費用を守る、③悪質な選挙違反をしたときは当選を辞退する、の三点を骨子とした要望書を候補者の選挙事務所に持参し、要望書を高らかに読み上げて、事務所内に掲示するよう依頼している。

\*

月一回の勉強会の実施等を年会費・通信費等を徴しての自主運営で行っていること、六〇年近くにわたって会員数・活動内容を維持継続していること、また新会員確保のための新しい相互学習会の取組み等が評価された。

## 長崎市明るい選挙推進おたくさの会

長崎市明るい選挙推進おたくさの会は、昭和四〇年に長崎市内の消費生活学校の会員である婦人をもって、明るく正しい選挙推進話しあいグループとして発足し、その後、五年に明るい選挙推進話しあいグループ連絡協議会として改組して組織の強化を図り、六二年に市花「あじさい（学名ヒドラングア・オタクサ）」にちなんで「長崎市明るい選挙推進おたくさの会」と名称変更して現在に至っている。現会員は女性のみ一二七名。

### 九グループが月一回話し合い活動

日常は、市内に九つある話しあいグループごとに、月に一回、公民館等を集まり、年間

計画に基づいた話し合い活動をしている。選挙に対する研鑽・啓発活動に限らず、環境問題、食の安心・安全、育児等、多岐にわたったテーマについて、女性の立場から意見を話し合い、一般教養の向上にも努めている。テーマは様々であるが、単なる井戸端会議で終わらずに、話し合いが政治・選挙の大切さまでつながっていくような運営を心がけている。

県議会や市議会傍聴を含め各種施設の見学や講演会の開催等の学習活動も行っており、活動に主体性を持たせるため年会費三〇〇円を集めている。

また、県や明るい選挙推進協会主催の各種研修会に参加し学んだことを他の会員にも共有してもらうため、年一回開催される総会の場で研修会参加者による内容を発表してもらうなどして、選挙に関する研鑽を深めてきた。

**選挙時の啓発**

選挙時には、県主催の街頭啓発パレードに参加するとともに、各話しあいグループの地元で啓発物資を配布するなどしている。特に、市議・市長選挙が行われる際には、市主催の選挙啓発パレードに会員一〇〇名程度が参加する。長崎のまつり「おくんち」の出し物にもある「コッコデショ」で使用する神輿を模したものを会員で担ぎ市の中心街を練り歩くなど、工夫しながらの選挙啓発に努めてきた。

期日前投票所での投票立会人や開票所での開票分類の業務を担当し、特に開票作業時に

は会の名称がプリントされたハッピを着用するなどして、積極的に各選挙に関わっている。

これらの長年にわたる活動が認められ、平成一九年度には地方自治法施行六十周年記念総務大臣表彰を受賞した。

話し合い活動の代表的団体として、九つのグループが四〇年以上にわたって月一回の話し合い活動を継続するとともに、街頭啓発パレード等に多数参加していることなどが評価された。



街頭啓発パレード

**鹿児島県学生投票率一〇〇%をめざす会**

「学生投票率一〇〇%をめざす会」は、平成十一年に鹿児島県内の大学生をメンバーとして発足した。現在十三名のメンバーが活動している。

**大学生の自主性を尊重した組織**

第四一回衆議院選挙（平成八年）での二〇歳代の投票率は極端に低く、また他の選挙でも同様な傾向にあったため、鹿児島県選挙管は大学生を中心とする若者を対象とした選挙啓

発事業の検討を始めた。この事業のねらいは、①学生の視点で新しい発想の啓発事業を行うこと、②学生に政治や選挙について考える機会を提供すること、③同世代の立場から投票参加を呼びかけること、であった。

大学生の自主性を尊重しながら組織をつくり上げていくことには多くの課題があり、進め方は慎重を期して行われた。県内にある四年制大学（六大学）の学生部等に事業の趣旨

を説明するとともに学生の推薦を依頼し、各大学二〜四人の計一五人の推薦を受けた。この一五人の学生の協力により数回の設立準備検討会等を開催、次第に設立に向けての気運が高まっていった。そして平成十一年十二月に、設立総会および記念講演会が開催され、正式に学生による自主的な会の活動が始まった。

**若者による若者への啓発活動**

行ってきた主な活動は、以下のとおりである。  
①学生の視点で新しい発想の啓発事業を行う：各種選挙時の啓発物資の作成や学園祭での啓発イベントの企画・実施（鹿児島純心女子大学でのクイズとダンスのステージ・パフォーマンス等）。

②学生に政治や選挙について考える機会を提供する：毎月の勉強会・選挙に関する知識の習得のための講義、選挙や学園祭での啓発内容の検討）、合宿による研修、各種研修会等への参加。特に年一回実施する合宿では時間をかけた討議を行い、平成一九年度は「模擬選挙企画書を作る」というテーマで、二グループに分かれて選挙啓発全体の企画案を作成した。二〇年度は、模擬の選挙啓発ホームページを作成する研修を実施した。



平成21年成人式啓発物資

③同世代の立場から投票参加を呼びかける  
：選挙時の街頭啓発、学園祭（鹿児島純心女子大学、鹿児島国際大学）での啓発、専門学校（奄美看護福祉専門学校）での選挙講座などで投票参加の呼びかけ。成人式では、メンバーが選んだ啓発物資を配布しているが、そのキャッチフレーズも、硬くならずインパクトのある文言を毎回メンバーが考えている（例：平成二〇年、ねずみ年、絆創膏と綿棒セット、「チューもく！選挙権」）。

### 明推協の活動への参加も

若者の投票率の低下傾向を改善するため、若者自身がこのような団体をつくり啓発

活動を行うことは、全国でも先進的な試みであり、その後の各地での同様の団体の設立や活動に影響を与えてきた。

設立から現在に至るまで継続して啓発活動を行ってきており、彼らの活動は今後の明推協活動にも大きな力を与えるものと期待されている。

\*

若者グループのさきがけであること、学生が順次卒業していく中、一〇年にわたって会員を確保し、若者による若者への啓発活動を継続していることが評価された。

## 奄美市明るい選挙推進協議会

平成一八年の鹿児島県名瀬市、住用村、笠利町の合併により、奄美市明推協は発足した（会員数六二名）。合併が行われた自治体の明推協は組織の整備に時間がかかることが多い

中、奄美市明推協では速やかな組織の拡充が図られ、啓発活動でも旧名瀬市明推協が実施してきた夏祭りでの啓発を旧住用村・旧笠利町の夏祭りでも実施するなど、旧名瀬市明推協の活動を軸に継続的で積極的な取り組みが進められてきた。会員は、三九歳から九〇歳までと幅広い年齢層にわたっており、職種も様々であることから、明推協の活動にはいろいろな意見、アイデアが出され、活動に独創性が生まれている。

市民の政治や選挙に対する関心は高く、過去の国政選挙においては、県内の市の中で常に上位の投票率を残している。

### 寸劇や替え歌などの独創的な啓発活動

常時啓発活動は、特に広報伝事業に力を入れ、独創的な活動を実施している。

①選挙浄化の活動として、旧名瀬市議会による「選挙浄化市民宣言」採択以降、毎年六月一八日を「むいはんのひ」（ごろあわせ）と定め、市内にパレードを練り出してチラシ、啓発物資等を配布するなどの街頭啓発を行ってきた。この活動は、平成二〇年で二五年を迎えている。

②老人ホームや専門学校等を訪問し、選挙

に関する寸劇、唄や踊り、選挙講座を行っている。みんなに楽しんでもらえる啓発活動の方法を検討したところ寸劇が候補にあがり、女性委員



「白バラ劇団」の寸劇

を中心とした一八名で練習に取り組んだ。平成六年に老人ホームで寸劇を披露して以来、年に一回継続して実施してきている（平成一〇年からは「白バラ劇団」と称している）。独自性を出すためにセリフは方言を使い、見ている人が飽きないように全体を一〇分以内に収めるなどの工夫をしている。近頃では専門学校（奄美看護福祉専門学校）でも寸劇を行い、若い世代に選挙の大切さを訴えている。

③毎年八月に行われる夏まつり（奄美まつり・あやまる祭り・三太郎祭り）には、山車を作ってパレードに参加。パレードでは替え歌（月の白浜・奄美小唄・名瀬セレナーデ）に合わせて踊り市内を練り歩くとともに、チラシ、うちわ等の啓発物資を観客に配布し選挙啓発に努めている。替え歌は選管事務局と推進委員が作詞し、一票の大切さを歌で浸透を図ることを目的に、親しみのある地元の曲（島唄）に乗せて歌っている。

④そのほか成人式では選挙のパフレットと記念品を贈呈し、また県明推協大島支会が年二回発行する広報誌「白ばら」を市内全世

帯へ配布するなど、選挙に対する認識を高める活動を積極的に行っている。

\*

推進委員手づくりの寸劇による啓発、祭り

## 沖縄県明るい選挙推進青年会VOTE

平成一八年、政治離れが進む若い有権者の投票率を上げようと、「ボートとせずにVOTE（投票）しよう」をスローガンに、沖縄県主催の青年リーダー研修会の履修者を中心とする二十代から三十代の社会人や学生ら一三人により「沖縄県明るい選挙推進青年会VOTE」が設立された（現会員一〇名）。

沖縄県においても若者の投票率の低下は顕著であり、なぜ若者がこのような現状であるのか議論を重ねた結果、選挙の意義の理解、政策判断能力の二つが欠如している、それは学校教育で実際の投票について教えることが少ないことに起因しているのではないかと、ということが見えてきた。そこで、小・中・高校、公民館、各種研修会に出向いての選挙出前講座を一九年から行うこととした。

### 小・中・高校向けのプログラム

選挙出前講座をどのようなプログラムで行うかは特に重要である。そこで小・中・高校の社会科担当の教員が集まる研修会に参加し、プログラムの検討を依頼している。当初のプログラムは「マニフェスト（給食に毎日デザートを出します）」「休み時間を長くします」

の山車を作ったのパレード、替え歌の制作などの独創的な活動を多彩に展開し、合併後も活動の拡大を図っていることが評価された。

等）を子供たちが政策判断し投票するものであったが、出席した教員から「そのテーマは子どもたちが本当に困っていることなのか」との指摘を受けた。

そこで、子どもたち自身が本当に学校で困っていることを探り、これを解決していくための簡易なマニフェストを作成し、立会演説会を行い、政策判断し、模擬投票を行う小学生向けプログラムを完成させた。同時に沖縄県選挙、明推協が中心となって製作した市民性教育副読本『小さな市民の大きな力 私たちのまちづくり』のまちづくりゲームを活用した中・高校生向けのプログラムを作成した。子どもたちは、短い時間ではあるが、選挙の意義、政策判断の重要性を理解し、ほとんどの子どもたちが「二〇歳になったら選挙に行きます」と言っている。また、生徒会選挙に合わせた選挙出前講座も実施しており、生徒たちは選挙に対する強い関心を示すようになってきている。

### 公民館講座を利用した大人向けのプログラム

大人にもこのようなプログラムができないかという要望に応じて、公民館講座を活用し、

中学生（四〇代までの幅広い年代が参加して、実際のまちをテーマとした講座を開催した。まちの課題は何なのかを予想し、実際に街に出かけ確かめ、原因を追求する。それをもとに解決策を提案し、それがまちに合っているのかを住民に聞き再調査する。そして、誰が、いつ、いくらかけて、どのような方法で実行するのか、そして生み出される効果について、政策（マニフェスト）として具体的に作り上げていく。例えば、子どもたちの遊ぶ場所がないという課題から、公民館に週末カフェを開くという政策ができた。これらの政策をもとに、まちの長を決める模擬選挙を行い、政策判断をして投票する。こうしたプログラムを実施した。



まちづくりゲーム

講座を通して、世代間の交流が深まり、まちづくりとは何か、それが選挙や自分たちが投じる一票とどう関わってくるのかを、多くの受講生が理解できるようになっている。

\*

若者の投票率向上を目指し、明確な問題意識と目的を持って、小・中・高校向けに加えて公民館での大人向けの市民性教育を行っており、その先進性が評価された。

# 社会に生きる人々が政治

放送大学教授 宮本 みち子



若者が投票を躊躇する一つの理由は、「政治は難しくてわからない」という感情です。

政治は、彼ら／彼女らの生活とは縁遠いところで動いている世界だと感じるのです。しかも、学校教育期間が長くなり、消費社会が拡大するにしたがって、若者は社会への関心を失い、社会に背を向ける傾向が強まっていますから、ほうっておくと投票率は低下する危険があります。

ところが、スウェーデンを知ると、政治とは身近な日々の行為であることが自然に理解できる気がします。少子高齢化が進む先進工業国では、若い世代の社会的影響力は相対的に小さくなっていきます。このような状況に対して、若者の社会参加を促進し、社会的影響力を高める取り組みが強まっていますが、このような潮流をリードしたのは、スウェーデンをはじめとする北欧諸国でした。

## 日々の暮らしに政治がある

日本で「政治」というと、理念が先行して難解でとっつきにくいと感じるか、逆に生々しい利権がからんだ政争の世界を思い浮かべてしまいがちです。若者が政治に対して興味を持たないのも、このような政治のイメージにも一因があるように思います。ところが、スウェーデン社会にふれると、政治というものの意味が大いに違っていると感じます。つまり、日々の生活は政治的行為と密接にかかわっていて、大げさで難しいものではないのです。

スウェーデンをはじめ、北欧諸国は小さな国です。そのことを強調して、一億二千万人を要する日本ではスウェーデンの経験は通用しないという日本人もいます。しかし、人口が少ないという理由だけで、スウェーデンを軽視することは間違いです。そこには、人々

と社会との理想的な姿があると見えるからです。「社会は人々のためにある」、そして「人々が社会をつくっているのだ」という認識が人々に共有されていることに、スウェーデンの大きな特徴があります。そのことが社会システムに反映し、人々の意識や行動を形づくっていると思われるからです。

国家に対する人々の信頼は高く、国家と社会を持続していくために青少年・若者を育てていく必要があるという意志が人々に共有されていると思います。シテイズンシップ教育の理念もそこから発しているのです。

## スウェーデンの中学教科書『あなた自身の社会』

この本は、日本の皇太子も高く評価されたことで話題になりましたが、平成九年に立教大学の川上邦夫氏によって日本で翻訳出版（新評論発行）されてから現在まで、多くの人々に読まれ、深い共感を得てきました。この本を読むと、スウェーデン社会が青少年を信頼しながら、彼ら／彼女らに伝えたいと願っていることが具体的にわかる気がします。

この本は、中学校社会科で使われる教科書ですが、日本の公民科の教科書との違いは、教育のスタンスにあると思いま



す。客観的な知識を覚えさせるためのものではなく、子どもが実社会へ入っていくためのガイドブックという組み立てになっているからです。子どもたちが、日々の生活を賢く安全に送るために、知っておくべき知識や、近い将来に必要なはずの事柄が、わかりやすく、しかもきちんと説明されているのです。

さらに大きな特徴といえるのは、生徒たちに、社会は自分たちの手で変革できるものなのだということを教えていることです。スウェーデンの「若者政策法」の理念をそのまま体現しています。これに関しては次号で紹介いたします。この本の訳者の川上邦夫氏が的確に紹介しているように、社会を動かしているあらゆる制度や規則は、様々な考え方を人々の妥協の結果として存在しているけれど、もしあなたが多くの支持者を獲得できるなら、制度や規則は変えることができるのだということ伝えていきます。

それと関係しますが、貧しい家庭環境に育った者も、犯罪を犯した者も、自分の能力に自信がない者も、無気力な状態にある者も、今の状況を克服して建設的に生きることができるといふことを、繰り返しメッセージとして伝え、あなたが困難に打ち勝つために、社会には様々な支援が用意されていることも教えています。

スウェーデンは地方分権が進み、地方自治体（コミューン）が、住民の生活にもっとも

身近で重要な機能を果たしています。このコミューンの主人公として生きることが、「政治」の原点となっていることを、次のように表現しています。

「コミューンの住民は、共同して、コミューンで行われる事柄の大半を決定します。……また、共同でコミューンの権力と、さまざまな施設を所有しています。……住民は、コミューンのさまざまなサービスに依存しています。コミューンへの税金を通じて住民はそれらのサービスにかかわり、また、その運営経費を支払っています。」

## 子どもを市民として育てる国

日本と比較するとスウェーデンの若者の投票率はかなり高いのですが、その背景には、幼少の頃から社会の中で能動的に生きることが重視され、大人たちが青少年の発言に耳を

傾け、その声を社会に反映させようとする意識、制度、環境があるのです。そのような営みの結果として、高い投票率があるのだということを、これから五回のシリーズで述べていきたいと思っています。

まず第二回は、一九八〇年代に始まる若者政策の流れを書きます。それは青少年に民主主義社会の一員として生きること伝える取り組みとあってよいと思います。第三回は、若者が能動的に社会へ参画することを促し、若者の社会に対する影響力を強めることを目指す、地方自治体の政策と取り組みを紹介いたします。第四回は、青少年を地域社会の主人公として育てようという地方自治体の実践を紹介いたします。第五回は、実践的に民主主義を学ぶ場となっている高校の取り組みを紹介いたします。最終回は、「若者の手で、若者のために」をスローガンとする若者のNGOと、模擬投票の取り組みを見ていきます。

一年間よろしく願います。

### ●プロフィール—— みやもと みちこ

昭和22年生まれ。お茶の水女子大学大学院家政学研究科修了、千葉大学教育学部教授を経て現在は放送大学教養学部教授。社会学博士。現代社会における若者の社会的地位の変容に関する研究を国際比較の立場で研究している。主著に、『若者が社会的弱者に転落する』（洋泉社、平成14年）、『ポスト青年期と親子戦略』（勁草書房、平成16年）などがある。



スウェーデンの子どもたち（小学生）

# 時の話題

## 医師確保策

マスコミなどで指摘される医師不足。だが「医師不足」というキーワードは、問題の所在を曖昧にするだけ。「医療施設の偏在」「地域的な偏在」「診療科目の偏在」――の三つの「偏在」こそが、早急に解決しなければならぬ課題となっている。

### 増え続ける医師

「医師不足」というと、日本の医師がどんどん減少しているように思うが、実際はそうではない。全国の医師は毎年増え続けている。平成二年に二二万一七九七人だったが、一八年には二七万七九二七人。人口一〇万人当たりだと、一七一・三人から二一七・五人にまで増えている。

このデータを見れば、医師不足問題の所在が「医師不足」にないことは明らかだろう。それでも「医師不足」とされる要因はどこにあるのか。

実は、近年の日本の医療の大きな問題として、医師ではなく病院が減少している状況がある。歯科診療所を除く施設は「病院」と「一般診療所」に分類できるが、このうち

「病院」は平成二年の一万九六施設をピークに減り続け、一九年には八八六二施設まで減少した。その一方で、昭和六二年に七万九一三四施設だった「一般診療所」は、平成一九年に九万九五三二施設まで増えている。

診療所が増えたから住民は安心できるかというと、決してそうではない。診療所の内訳を見ると、有床診療所、つまりベッドがある診療所は昭和六二年の二万四九七五施設から平成一九年には一万二三九九施設にまで減少。ベッドのない無床診療所は五万四一五九施設から八万七一一三施設まで増加した。

無床の診療所、いわゆる「町医者」だけが全国で増えるという、医療施設の偏在が医療界の現状だ。入院できる診療所、高度医療ができる病院などが減少すれば、いざというとき、国民は安心できる医療サービスを受けることはできないことになる。

### 大きな地域格差

社会保障をテーマに四月二十一日に開かれた財政制度審議会・財政構造改革部会では、医療問題で活発な意見が交わされた。なかでも注目を集めたのが、部会に提出された人口と面積をベースにした都道府県別の医師数と診療科目別の医師数変化の資料だ。

都道府県別の医師数は、新聞などでも大きく報道されたが、面積と人口当たりの全国平均を一として指数化。これを人口と面積の割合を九対一に配分し、医師数が相対的に多い

都道府県から順に並べている。それによると、トップは東京都の三・一九で、最下位は茨城県の〇・七〇だった。

会合では「面積を考えると、土地の面積だけが面積ではない。例えば沖縄や長崎は離島が多い。あるいは東北地方は豪雪地帯があり交通が困難で、そういう地方固有の要素も考えなければいけない」などとの意見も出されたが、あらためて医師の地域的な偏在を明確にした形となった。

また、診療科目別の医師数の変化では、平成八年と比べると一八年には、産婦人科の医師が一〇・六%、外科が七・七%とそれぞれ減少していることが判明。これについても委員からは「例えば東北地方で産婦人科医が減っているという現象があるが、これは医師、産婦人科医が減っているのも事実だが、実際にはお産そのものが減っているのではないか」などの疑問も出されたが、現実に産婦人科医の急激な減少など、診療科目の偏在が進んでいることは間違いない。

### 収入格差、モンスター・ペイシエント…

医師はいるのに、病院勤務はせず開業医を選ぶ。そうした背景がある医療関係者は「勤務医は、労働が過酷な上に給料が安い。これでは誰も勤務医なんかやらない」と説明している。

事実、平成一九年の調査によると、病院勤務医の年収一四一五万円に対して、開業医

(法人など)は二五三二万円、開業医(個人)は、勤務医の約二倍の二八〇四万円に達している。

こうした状況について、別の関係者は「米国では、開業医より勤務医の方が収入が多い。日本とは逆に開業医が不足しているという地方があることも事実だが、開業医よりは勤務医の方が待遇がいいという方が正常な姿かもしれない」と語っている。

また、医師が病院勤務をしない理由として、医師や看護師、医療機関に対し理不尽な要求をしたり、暴言・暴力を繰り返したりするモンスターペイシエントと呼ばれる患者の存在を指摘する関係者もいる。

全日本病院協会が二〇年四月にまとめた「院内暴力など院内リスク管理体制に関する医療機関実態調査」によると、過去一年間に全国の病院の半数以上で、病院職員が患者や家族から暴力や暴言、セクハラ(性的嫌がらせ)などを受けたとされる。院内暴力を防ぐための措置として、約四割の病院が「監視カメラを設置している」ほか、警備員の巡回や警察官OBの配置などの対策を進めている病院もあったという。

## 後手に回る対策

こうした様々な問題に対して、厚生労働省は対策を講じているが、目覚ましい成果は挙がっていない。厚生労働、総務、文部科学の三省は、平成一七年八月に「医師確保総合対

策」、一八年八月に「新医師確保総合対策」を策定。また政府・与党は、一九年五月にさらなる対策として「緊急医師確保対策について」をまとめている。

これらの対策によって、医師不足地域に対し、緊急的医師を派遣しているほか、地域の中核病院である国立大附属病院の若手医師の処遇改善などを実施。また、地域の医師確保のため、知事が指定した医療機関で原則九年以上従事することを条件に、返還を免除する奨学金制度なども設立している。

厚生省は二一年度当初予算で、医師確保対策の推進として四八八億円を確保。この中で、過酷な夜間・休日の救急を担う勤務医に対する手当の財政的支援(二〇億円)、産科医らに分娩取扱手当の支給(二八億円)、へき地に派遣される医師の移動手当(一億四〇〇〇万円)など新たな施策を盛り込んだほか、勤務医などの勤務状況の改善・業務負担の軽減に向けて三七億円を計上している。

## 臨床研修制度の見直し

こうした財政的措置のほか、臨床研修制度の見直しも課題となっている。それまでのインターン制度(実地修練制度)に代わり昭和四三年に創設された臨床研修制度は、大学医学部卒業直後に国家試験を受験、免許取得後も二年以上の臨床研修を行うことを求めている。

研修医の七割が大学病院、三割が臨床研修

病院で研修を受けていたとされるが、医局関連の単一診療科での研修になりがちだったことや、労働面や給与面での処遇が劣悪で、生活費を当直などのアルバイトに依存せざるを得なかったなどの問題を抱えていた。

このため、平成一六年四月にスタートした新しい臨床研修制度では、プライマリ・ケア(患者が最初に接する医師等による保健医療活動)を中心とした幅広い診療能力を習得するため二年間の臨床研修を義務化する一方、適正な給与の支給と研修中のアルバイトの禁止などを定めた。しかし、研修先が医学生希望に沿って決まるため大学の医師配置機能が喪失、研修医が都市部へ集中したほか、アルバイトの禁止で夜間休日の医師が手当てでなくなるという事態も招いた。

厚生省の対策は後手に回り、先ごろやっと同省の「臨床研修制度のあり方に関する検討会」が、臨床研修医の受入れ人数を都道府県ごとに上限を設けるとの方向を打ち出した。

舛添厚労相は「若い医師にどこで研修しなさいと強制するのは、憲法上の人権とかを考へても問題があるし、しかし、一方で医者不足をどうするかという問題もある」と述べている。強制できなければ、大規模な財政的支援などをしない限り、研修医や医師を地域に根付かせることは不可能だ。

医師の偏在はすでに「重篤な症状」といえる。抜本的に取り組まなければ、手遅れになる恐れがある。



**仙台市**  
**選挙啓発市民企画「コンペ」**  
**「市長選をみんなでデザインしよう」**

仙台市選管は、七月二六日に行われる市長選挙で、有権者の選挙への関心を喚起し、投票率の向上を目指すため、「市長選をみんなでデザインしよう」と題し、市民や団体が自ら企画し実践する選挙啓発事業を募集し、採択された事業は市選管からの委託事業として実施してもらうことにしました。募集期間は二月一〇日～三月一

三日で、七件の応募があり、うち六件が公開プレゼンテーション審査に進み、市選管および市明推協が設置する審査委員会の審査の結果、四件の採択が決定しました。採用された企画および実施団体は、次のとおりです。

①大型店舗・市民利用施設などに、本物らしい模擬投票所を開設。投票体験をしてもらい、投票マニュアルを作成して配布。特に若い世代の、投票所への「距離感」を縮め、市長選挙での投票を促す。(市選管が平成二〇年度から行っている「選挙ガイドボランティア事業」の参加者有志)

②告示日に一番町(市中心部のアーケード街)を、仙台市選挙マスコットキャラクターの着ぐるみ「てとりん」とともに、のぼり、風船などを持ってパレードし、市長選挙を周知する。風船を配布し、一定時間持ち歩いてもらうことでPR効果を高める。(「仙挙行こう会」市選管の「選挙サポーター事業」のOB・OGにより結成された選挙啓発を目的とした自主団体)

③告示日の約一カ月前に人が集まる場所で模擬投票を行い、市長選挙の周知や投票方法の解説などの資料を配布する。子どもも含め、家族ぐるみの関心を喚起する。(「NPO法人ドットジェイピー 東北支部」若年層の投票率向上を目的として、議員インターンシッププログラム等を運営している全国的な大学生を中心とした組織)

④市長選挙を若者に周知するため、大学または公共施設で選挙クイズ、スライド上映などを内容としたイベントを開催する。(「東北大学法社会学研究会」東北大学法学部公認の学生による自主ゼミで、イベントや勉強会開催などの活動を行っている)

**秋田県秋田市**  
**高校生が投票呼びかけ**

秋田市選管と明推協は、秋田市長選挙(四月十二日投票)の投票を呼びかける街頭キャンペーンを、告示を翌日に控えた四月四日にJR秋田駅のぼほろーど(東西連絡自由通路)近辺で行いました。

このキャンペーンに、若い世代の選挙への関心を高めようと、秋田市立秋田商業高校生徒会のメンバー約一五人が参加し、「あなたの一票をお願いします」などと手書きしたメッセージを添えたウェットティッシュなどを買い物客らに手渡しました。

秋田商業高校生徒会は、これまでも、主に春に行われる選挙において、啓発活動に参加してくれています。

**むつたま市**  
**選挙啓発イベント**  
**「選挙だヨー! 全員集合」**

PRさんさいたま(さいたま市青年選挙サポーターの会)は、さいたま市長選挙(五月二四日投票)への若者の投票参加を呼びかけるイベントを投票日一週間前の五月一七日(日)に、一一〇の専門店と四つの大型店が集まるショッピングセンターで実施しました。主催者として企画立案や協力団体への依頼、イベント当日の運営もすべて会員が行いました。

模擬投票、投票日や前回投票率を問う選挙クイズのほか、大学や



市長選挙での啓発活動

市民のサークル等の協力を得て、吹奏楽の演奏（雨のため中止）、漫才、寄席、歌（ミュージカル）などのプログラムもあり、家族連れや若者が集まりました。模擬投票は、さいたま市選挙キャラクターの「のんびらくん」と「めいすいくん」の二人の候補者がまちづくりの公約を発表し、来場者にどちらがよいか本物の投票箱、記載台を使って投票してもらい、最後に当選者への当選証書付与式を行いました。

E-Railや「たまはイベント」のほかにも選挙CMを作成しました。「就職試験に臨む学生が面接で選挙の大切さをきびしく指摘されて大あわて！」という筋書きで、脚本、出演、撮影、制作のすべてを

会員が行いました。JR大宮駅前にあるファッションビルの街頭ビジョンやローカルテレビ局（テレビ埼玉）で流されるとともに、選挙管特設ホームページでも公開されました。

### 新潟県長岡市

#### ご当地めいすいくん

今年のNHK大河ドラマ「天地人」の主人公は直江兼続とその妻お船ですが、直江氏の居城与板城は長岡市にありました。そこで、長岡市選挙は、二人をモチーフに市選挙マスコットとして「天地人めいすいくん」を誕生させました。雪国・越後で生まれた「義」と「愛」

#### 〈天地人めいすいくん〉



兼続



お船

の精神。めいすいくんも、越後長岡の明るい選挙実現のため、「仁愛」を兜に掲げて投票を呼びかけます。お船は「お選」に掛けており、明るい選挙を意味しています。特に若年層の投票率向上のため、夫・兼続とともに、長岡の啓発活動に力を入れます。

### 宮崎県延岡市

#### 「ミニ選」活動開始

延岡市の「ミニ選挙管理委員会2001」は、小野育恵新会長のもと、早くも平成二二年度の事業を開始しました。まず四月八日には、市内のマラソン大会に、ゴール地点での給水係など実行委員会のお手伝いとして参加しました。選挙啓発そのものを目的とした活動ではありませんでしたが、「♡MN」と染め抜いた揃いのTシャツを着て、ミニ選をアピールしました。このマラソンには市の選挙OB職員がミニ選ののぼりを持って参加し、一〇kmを完走しました。翌九日には、今年度第一回の定例会を開き、年度の活動案などについて協議しました。

四月一八日（土）には、九州三大春まつりの一つ「延岡お大師まつり」で、ミニ選啓発を実施しました。午後一時から三時までの二時間、DVD「うるままでのGO!GO!選挙」と五月二日スタートの裁判員制度の冊子、パンフレットを配布。昨年と同じくめいすいくんとのじゃんけん対決も行われました。DVDを配る時は「おしりかじり虫の……」と説明をして渡し、すごく喜んでもらえました。

啓発参加者は、新人二人を含む一四人。揃いのミニ選Tシャツを着用し、多くの市民から「♡MN」の意味を聞かれ、それだけでも啓発の成果がありました。



北浦さくらマラソン啓発

～この人を見よ～

# 田澤義鋪

## 第1回 生い立ち

画／藤原良二



明治以降で  
真に尊敬に  
値する人物を  
3人あげよと  
言われるなら  
は……

福沢諭吉、  
新渡戸稲造……

そして特に  
田澤義鋪を  
上げる

誠実さ、確乎として  
信念を貫いた生涯、毅然たる清節。  
私は百代にわたって「この人を見よ」と  
言いたい!

下村湖人

\*下村湖人（1884～1955年）：『次郎物語』の著者。田澤とは高校、大学と同窓。

父上が毎朝  
漢学や歴史は  
教えて下さる  
です!

旧鹿島藩士で  
文房具店を営む  
父・義陳  
聡明な母・みす  
後に東京女子高等  
師範学校に進む  
8歳年上の姉・ふみ  
の四大家族であった



義鋪は1885年（明治18年）  
佐賀県鹿島村（現鹿島市）で生まれた

義舗の体は小さかったが  
 学業は進み 数え5歳で  
 小学校に入学した



お世継ぎの学友に  
 選ばれたとぞす

うれしかー

鍋島直彬

父が仕えた旧鹿島藩主で  
 英君と謳われた鍋島直彬は  
 旧藩士の子弟の教育に  
 力を注いだ



15歳の夏  
 鹿島中学の同級生ら5人で  
 学生会のボートに乗り  
 長崎遠征に挑戦するも  
 途中嵐でボートが破損  
 頓挫



代表して  
 学生に陳謝したが  
 それがいっつか  
 大冒険の体験談となり  
 拍手喝采で終え  
 後年の雄弁さの  
 片鱗が示された



17歳の秋 熊本  
 の  
 第五高等学校  
 \*  
 第一部に入学

酒は飲ま  
 ん  
 とぞす!

学生の飲酒の悪弊を憂う  
 校長の禁酒令のもと  
 五高最初の禁酒宣誓者の  
 一人として入学した



よし

ボート部に入部  
 一年生で正選手となる



\*第一部は法文科 二部は工農科 三部は医科

3年生の時  
三部対抗ボートレースに  
第一部のリーダーとして  
臨み 勝利に導いたが



その祝勝会で  
酒を飲み  
退学処分を  
受けてしまう



\*しかし  
同級生たちが  
処分取り消しに  
奔走し 来期から  
復学が認められた



以降卒業まで  
一切酒を口に  
しなかった

ありがたう  
みんな!

\*同級生を中心に盟友となる、後の農林大臣、後藤文夫がいた

21歳東京帝国大学に進み  
政治学を専攻の傍ら  
直彬が起こした育英会で活動し  
郷土の先輩の信頼と  
同輩 後輩の敬愛を得た

育英会



ばってん  
偏狭な地方的感情で  
小さな団結を固くして  
他との対立意識を  
助長したらいかんばい

\*苦力(クーリ)：東南アジア諸地域の肉体労働者

1909年(明治42年)  
卒業前に満州と朝鮮を旅行し  
日露戦争勝利を笠に着た  
日本人の傲慢さと\*苦力に対する  
非人道的扱いに衝撃を受けた



この国民性を  
人類的、世界的  
視野に立て

道義なくして  
何の国家だ!!

政治と教育  
によって直すことが  
必要だ!!

## 明るい選挙啓発ポスターの作品募集

小中高校生を対象とする明るい選挙啓発ポスターコンクールは、本年度も都道府県選挙管理委員会連合会、都道府県および市区町村の選挙管理委員会との共催、文部科学省、総務省、全国の教育委員会の後援により実施いたします。

昨年度は約9,000校、約13万4,000人の児童・生徒の皆さんが応募してくれました。協会では将来の有権者に選挙、政治に関心を持ってもらうきっかけとなる参加型啓発事業と考えて取り組んでおります。61回目となる今回は、協会として初めて募集パンフレットを作成し、希望部数を選管に送付いたしました。お子さん、お孫さんに応募を勧めていただくとともに、ポスター制作を通じて政治や選挙について話し合う場を持っていただきますようお願いいたします。

## 明るい選挙推進優良活動表彰

明るい選挙の推進に取り組む活動で、他の模範とするにふさわしい活動を「優良活動表彰」として表彰します。

表彰対象となる団体には、都道府県、指定都市および市区町村の明るい選挙推進協議会、白バラ会ならびにそれらの内部組織または関連組織のほか、自治会、婦人会、NPO法人、その他の団体ならびにそれらの内部組織または関連組織で明るい選挙の推進に取り組んでいるものが含まれます。

受賞団体は10団体程度とし、奨励金各20万円を贈呈します。過去の受賞団体では、揃いのTシャツを作成してPR度をアップさせる、啓発イベントを実施するなど大いに活用いただいております。

6月1日から募集いたしますので、奮っての応募をお待ちしております。

## 市区町村明推協研修会等開催支援事業

市区町村明推協の常時啓発活動を支援するため、市区町村明推協等が講師・アドバイザーを招聘して、研修会・学習会・講演会等を開催する場合に要する講師の謝金、旅費および会場借上費の全部または一部について、1団体あたり15万円を限度に助成します。申請書の書式など詳しくは協会ホームページに掲載しております。なお、都道府県指定都市選管および協会が近年講演等を依頼した方々のリストを、参考までにめいすいNETに掲載しております（このリストは、昨年都道府県指定都市選管各位にご提供いただいた資料に基づき作成したものです。内部資料的なものもありますので、めいすいNETでのご紹介とさせていただきます）。

## 編集後記

- 特集は2本立てとし、20年度中央研修会で実施した明推協活動に参加する若者啓発グループによる「若者シンポジウム」の報告と、「平成20年度優良活動団体」の活動と組織の概要の紹介です。
- 今号から新連載を3本スタートさせます。
  - ・ 海外のシティズンシップ教育について、今年度はスウェーデンの事情を、放送大学教授の宮本みち子さんにご紹介いただきます。宮本教授は、経済産業省「シティズンシップ教育と経済社会での人々の活躍についての研究会」の委員長を務められました。最近、いろいろな面でその良さが喧伝されている北欧諸国の一角で

- あるスウェーデン。その良さの原点とも考えられるシティズンシップ教育を、6回連載で紹介します。
- ・ 絵本の主人公は政治教育運動の先駆けであり選挙粛正運動の生みの親、また青年団の父と呼ばれる田澤義輔です。田澤先生は折々「虚空に矢を射る」と言って活動を続けていたそうです。
- ・ これまで連載してきました「施策紹介」に替えて、幅広いテーマを取り上げる「時の話題」をスタートさせます。
- 次号は7月31日発行の予定です。

編集・発行 ●財団法人 明るい選挙推進協会

〒105-0001 東京都港区虎ノ門2丁目1番1号 商船三井ビル4F ☎ 03 (3560) 6266・6267 FAX 03 (3560) 6268  
〈ホームページ〉 <http://www.akaruisenkyo.or.jp/> 〈メールアドレス〉 [akaruisenkyo@mua.biglobe.ne.jp](mailto:akaruisenkyo@mua.biglobe.ne.jp)

編集協力 ●株式会社 公職研

## NO MORE エコバッグ



神さまお願いがあります。私エコバッグもういら  
ないんです。いらぬのにみんなくれるんです。  
雑誌のふろく、お店のおまけ、あとは街で配って  
いたりとか。ふつうに使うにはあんまりお粗末な  
布ぶくろに、エコバッグって名前をつけるだけで  
安心して、無駄につくりすぎてるような気がする  
んです。スーパーとかでもらえるビニール袋だっ  
てちょっとは欲しいです。ゴミ捨てに使いたいで  
す。一番ムダになってるのは、使い道のない、軒  
先にかけてればなしの彼ら、エコバッグ7枚。  
神様お願いです。私、エコバッグはもういらぬ  
んです。

## 最近の子



先日、子供達と近所を散歩していた時の事。何  
となく登れそうな壁があったので「登れる？」と  
聞いてみた楽しそうに登る子供を見て写メをパシ  
ャ。数日後近所から危ないのであんな真似はさせ  
ないでくださいとの事…子供に危険だということ  
を教えるのも親の教育の一環だと私は思う。

### ケータイ・ジャーナリスト・コンテスト2008

明るい選挙推進協会は「Yahoo! みんなの政治」とタイアップして3回目となるコンテストを開催し、昨年11月24日から今年2月1日まで作品を募集しました。ケータイで写真を撮り、コメントを書き、コンテスト公式サイトにメールで送信し、公開する。身近な風景の中に潜む様々な社会問題に気づき、写真を通じて共感しあうことで世の中に対する問題意識や政治への関心を高めてもらうことが目的です。応募作品はネット投票と審査員による審査で15作品に絞られ、ネット決選投票によりグランプリと準グランプリが決定されました。